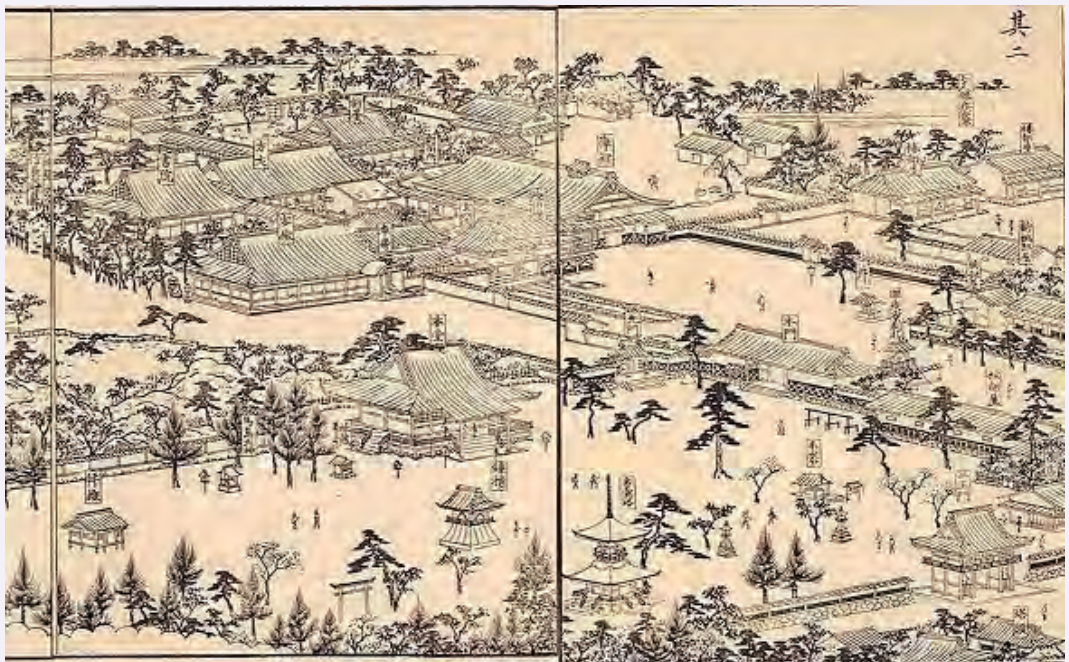


# 第7章

## 歴史文化の伝承と 新たな文化



# 第1節 守り、伝える文化財

## まちの文化財制度

文化財は、長い歴史の中で生まれ、育まれ、守り伝えられてきた貴重な財産で、地域の文化の発展と向上の基礎をなすものといえます。

昭和24(1949)年に、奈良県の法隆寺にある金堂壁画が焼損したことを機に、翌年、文化財の保護を目的とした「文化財保護法」が制定されました。

町には、日本初の眼科治療院である明眼院があり、庇護を受けた為政者などからの宝物が数多く伝わっています。そのなかから昭和29(1954)年に4件、翌年に4件の寺宝が、県の

指定文化財となりました。

また、明眼院以外にも、702年創建の自性院や、尾張徳川家と縁のある圓長寺など、歴史のある寺院は多く、文化財の保護や活用に関心を注いでいます。

昭和63(1988)年に、大治町文化財保護条例を制定しました。

町内の歴史文化や文化財の発掘に努め、平成3(1991)年には、町で初めてとなる指定文化財として、6件を指定しました。

## 歴史文化を知り、親しむために

平成4(1992)年に公民館のロビーで「町指定文化財展」を開催し、指定した文化財を詳しく紹介しました。その後も町の歴史文化を調査するごとに企画展を開催し、親子で歴史探索する講座などを通して町の魅力を伝えてき

ました。

平成5(1993)年には、文化財の存在を身近に感じつつ、関心を高めても



町指定文化財を紹介する展示（平成4年）



文化財の説明付きの案内板

られるように、町内の29か所に文化財の案内標識を設置しました。

平成11(1999)年には、大治小学校に隣接する大治会館の2階に、歴史民俗資料室を開室しました。変化していく生活や農作業の道具などから、人々の暮らしを学べるようにしました。

この資料室の特徴は、町の伝統的な産業である扇骨作りに関する展示があることでした。

平成27(2015)年に大治会館を開



歴史民俗資料室でむかしの暮らしを学ぶ



平成30年西公民館の企画展（平成30年）

鎖してからは、小学校の郷土学習に合わせて西公民館で民具の企画展を開催しました。

昔を懐かしむお年寄りから小さな子どもまでが訪れ、家族で昔の思い出話をする姿も見られました。

令和5(2023)年には、多世代交流センターに民具の常設展示室を設けました。扇骨をはじめとする民具を展示し、毎日、自由に見学できるようにしました。



公民館の展示コーナーでの扇骨の紹介



多世代交流センターの展示室 居間を再現



## 文化財フェアの開催

町の歴史や文化財を再認識する動きが活発化し、平成24(2012)年に文化財フェアを開催しました。

フェアの目玉は、町内の寺院が所有する仏像や絵画などを一堂に展示した展覧会です。会場には、厳かな雰囲気の中、仏像や古文書などの宝物がずらりと並びました。

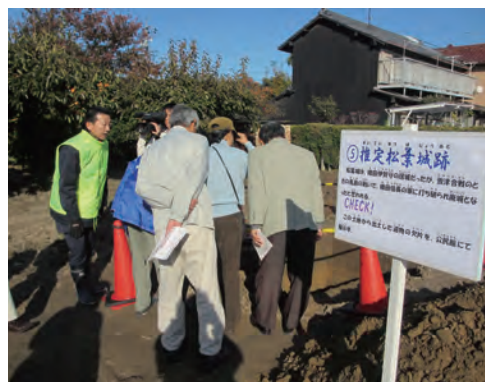
所蔵する寺院でも、通常は非公開の寺宝ばかりのため、町にこのように多くの文化財があることを、初めて大々的に知らせる企画となりました。

展覧会をはじめ、歴史探訪スタンプラリーや遺跡の試掘現場



寺院の秘宝を展示

の見学などを開催し、町内外から8,500人余りが参加しました。



歴史文化を伝えるスポットを散策する、歴史探訪スタンプラリー

翌年にも、文化財展「自性院一祈りとほとけさまー」を開催しました。町で最も古い歴史を持つ、自性院に注目した展覧会です。

公民館の2階のロビーに、仏像5

体と掛け軸、版木などを展示しました。

特に目を引いたのは、平安時代の仏像です。町内外から訪れた多くの見学者に、町の歴史文化の奥深さを伝えることができました。



自性院の秘宝がずらり



自性院展チラシ



子どもたちも、熱心に見学

町の歴史を勉強して、  
守っていききたいな。



町の歴史がこんなに深い  
なんて、びっくりした！



文化財フェアチラシ



## 指定文化財

### 県指定文化財

#### けんぽんちやくしよく か ちょう ず 絹本 著 色花鳥図

明眼院蔵（絵画）



向かって右側にはかささぎの群れ、左側にはは は ちょうなどの小鳥を、左右対称に描いています。

後水尾上皇からの下賜品と伝わっています。

#### けんぽんちやくしよく か ちょう ず 絹本 著 色花鳥図

明眼院蔵（絵画）



柳や百合、さざんか山茶花が咲く水辺で、鳥が遊ぶ様子を描いています。輪郭線を描かずに、彩色で巧みに表現しています。落ち着いた構図の中にも、朱や群青などの

鮮やかな色彩が画面を引き立てています。

#### けんぽんぼく が ふうじんらいじん ず 絹本墨画風神雷神図

明眼院蔵（絵画）

江戸幕府の御用絵師、かのうつねのぶ狩野常信が描いたと伝わっています。

向かって右の風神の頭髮や天衣が大きく後方にひるがえり、吹き出す風の勢いが表現されています。

左の雷神は前かがみになって、渾身の力で太鼓を打ち鳴らす様子が生き生きと描かれています。



#### し ほんぼく が えん が さんすい ず 紙本墨画円画山水図

明眼院蔵（絵画）

丸い形を窓に見立てて、その窓から見える水辺の景色を描いています。水辺の建物で出航を待ちながら歓談する人々と、港町の情景が、水墨画で表現されています。

#### ちゃばこ 茶箱 明眼院蔵（工芸）



後水尾上皇からの下賜品と伝わっています。明眼院の第13世院主・円慶が、後水尾上皇の第三皇女の眼病治療をし

#### こ はぎちやわん 古萩茶碗 明眼院蔵（工芸）



たことから、明眼院は上皇の庇護を受けました。

木目が美しい鉄刀木に、たが や さん金時絵で糸柶の文様があり、上皇からの下賜の伝えもうなずける品です。



#### とうせい る そんちやつぼ 陶製呂宋茶壺 明眼院蔵（工芸）



後水尾上皇からの下賜品と伝わっています。豊かな胴の張り、底に向かってなだらかにすぼまる形が美しい四耳壺です。中国や南方から輸入されたものを総合して呂宋と呼び、江戸時代初期の茶の湯で珍重されました。

こんごうれいしょ  
金剛鈴杵 明眼院蔵（工芸）

密教法具の一つです。通常は、上部に鉦と呼ばれる握り部分がありますが、本品の鉦は失われています。内部に吊り下げて音を鳴らす呼舌が、魚の形をしている点が特徴です。伝教大師の招来品と伝わっています。



もくぞうやく し によらい ざ ぞう  
木造薬師如来坐像 自性院蔵（彫刻）

桧の一木造です。部分的に金箔が残っており、つくられた当初の金色に輝く姿がしのべられます。10世紀の作とみられ、町で最も古い彫刻です。頭の中央がなだらかに盛り上がり、目や口が小さく中心に集まる、平安時代前期の特徴がみられます。

自性院は、成願寺・楊柳寺・新善光寺の3か寺の歴史を受け継いでいます。その一つ、成願寺は正暦3（992）年に建物を再建しており、この際に造



像されたとみる説もあります。

町指定文化財

おんじき き  
御食器 明眼院蔵（工芸）

御食や菓子などを盛って仏に供える器です。底裏に刻まれている文字から、天文10（1541）年頃の作と分かります。



ほうきよういんとう  
宝筐印塔 明眼院蔵（建造物）

南北朝時代に建てられたとみられています。

相輪の上部や笠の隅飾りが欠失し、塔身に陰刻された梵字に摩耗がみられるなど、年代を経た様子がうかがえます。柔らかく丸みをもった穏やかな蓮弁が特徴です。



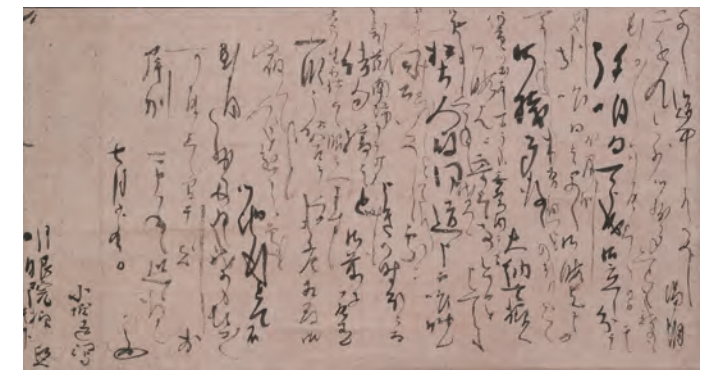
わにぐち  
鰐口 自性院蔵（工芸）

寺院の堂の軒下に吊るして鳴らします。文明18（1486）年に成願寺に寄進されたことが刻まれています。径45cm、厚さ16cmもあり、成願寺には、このような大型鰐口を吊り下げるにふさわしい規模の建物があったことが分かります。



こぼりえんしゅうしょじょう  
小堀遠州書状 明眼院蔵（書籍）

茶人で作庭家でもある大名の小堀遠州が、明眼院13世院主の円慶に宛てた手紙です。共に滞在していた江戸を先に出立する円慶との別れを惜しみ、遠州が京に戻る際には、明眼院で再会したいと書かれています。遠州は目を患っており、その

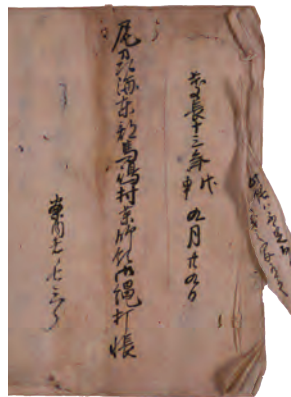


治療を兼ねての訪問かもしれません。また遠州は、明眼院の裏庭を作庭したと伝わっています。



びしゅうかいとうぐん ま じまむらやく しりょう お なわうちょう  
尾州海東郡馬嶋村薬師領御縄打帳

明眼院蔵（歴史資料）

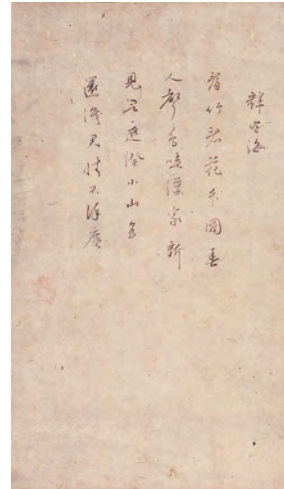


尾張藩が慶長13（1608）年に検地をし、田畑の等級や面積、所有者を記録しました。

馬嶋村薬師領は、明眼院の領地のことで、当時の寺領が四町七反七畝（現在の4万1,000㎡余り）だったことが分かります。

よしなおこうしちごんぜつく  
義直公七言絶句

圓長寺蔵（書籍）



圓長寺は、尾張徳川家が鷹狩りに赴く際の休息所でした。寛永2（1625）年6月に、尾張初代藩主義直公が圓長寺で、境内の空海ゆかりの「錫杖

の松」の由来を聞き、筆をとったと伝わっています。書体や「尾陽国主」の印から、義直公直筆と判断されています。

じんぶつさんすい か ちょう ず ろつきよくびょう ぶ  
人物山水花鳥圖六曲屏風

光暁寺蔵（絵画）



日本画家の森村<sup>よしね</sup>宜稲（1871～1938）が描きました。宜稲は、花鳥画が得意で、文展や帝展などで活躍しました。この屏風には、12か月を象徴する年中行事や風景、故事などが鮮やかに描かれています。

宜稲の父である森村大朴<sup>たいぼく</sup>は尾張藩の儒学者で、明治18（1885）年から光暁寺の北隣にあった「木犀校<sup>もくせい</sup>」で講義をしていました。大朴の没後、その供養のため、受講生だった大治村初代村長の恒川清左衛門らが、木犀校ゆかりの光暁寺に寄進しました。

もくぞう に おうぞう  
木造仁王像 明眼院蔵（彫刻）

明眼院の門前に安置され、境内を守護する仏像です。誇張された怒りの表情や、筋肉表現などに、鎌倉時代の特徴がみられます。像の形式や構造から、運慶・快慶に連なる慶派の仏師が造像



もくぞうだいにちによらい ざ ぞう  
木造大日如来坐像

明眼院蔵（彫刻）

明眼院の、多宝塔の本尊です。寄木造、玉眼で、表面には金箔がほどこされています。ボリュームを抑えた肉身部や、等間隔に配置された浅い衣のひだなど、全体に穏やかな雰囲気があります。一方、顔の張りや体の構えに丸みが薄れてきており、平安時代の様式を受け継ぎつつ、鎌倉時代に造像されたとみられます。

した可能性も指摘されています。

また、慶長2（1597）年に福島正則が奉納した、あま市にある甚目寺の仁王像と共通点が多く、何らかの関係性を感じられます。





かぐらだいこ よめじし  
神楽太鼓、嫁獅子

大治太鼓保存会継承（無形民俗）

どちらも町内で、江戸時代後期から行われていました。

神楽太鼓は、地区で所有している神楽屋形の太鼓を細い竹バチで叩くもので、高い音色が特徴です。五穀豊穡を願い、春祭りや秋祭りで打ち鳴らしながら、練り歩きます。代々、奏法を受け継ぐ地区と、大治太鼓保存会が中心となって演奏している地区があります。

嫁獅子は、獅子頭をかぶった男性が、女役を演じます。田舎芝居の舞台上演する娯楽の一つでした。もとは多くの演目がありましたが、祭礼の際の悪魔払いの演目を、大治太鼓保存会が継承しています。



神楽太鼓



嫁獅子

## 郷土文化認定

町で受け継がれてきた伝統的な芸能や工芸技術を永く守り伝えていくために、平成 28（2016）年に郷土文化認



郷土文化認定証書の授与（左から 2 番目が保田氏・3 番目が大治太鼓保存会会長 若山氏）

定制度を始めました。

未指定の文化財のうち、次世代に伝え残していくべきものを、少しでも早



保田氏作の能面（左：鼻瘤悪尉 右：増女）

く発掘し、保護していくことを目的としています。

平成 29（2017）年に保田 紹雲氏（能面制作）と大治太鼓保存会（神楽太鼓）を第 1 号として認定しました。

保田紹雲氏は、歴史的な能面をよく観察し、実物からでしか得られない、彫の深さや材の厚み、色などを学んで、

## 埋蔵文化財

町では、地表や地表近くのごく浅い土中から、焼き物のかけらなどが発見されることがあります。海拔ゼロメートル地帯であるために、過去の遺物が地中のごく浅い部分にとどまっています。

平成 20（2008）年頃、焼き物のかけらが多く発見される、西條の土地に注目が集まりました。

人々が住んでいた痕跡を確認するため、所有者の協力を得て、その土地の何か所かを試掘しました。

試掘では、建物跡は確認できませんでしたが、茶碗などの欠片が何点も出土しました。その特徴から、平安時代から近世にわたる、各時代の遺物であることが分かりました。

作品に生かしてきました。

その結果、能舞台での上演で使うことを、能楽師から認められる仕上がりとなりました。

また、多くの能面に触れて得た知見を深め、能面や面打ち師の研究論文も発表しています。



出土品の一部（上から 10 世紀の酒器、12～13 世紀の茶碗、14～15 世紀の梅瓶）



西條には、戦国時代に「松葉城」があったと伝え聞いている。ここが城だった可能性もあるのかもしれないね。



松葉城だとわかる、新しい発見があるといいなあ。

## Column

## 大治町の文化遺産「応挙館」をご存知ですか

「応挙館」とは、明眼院に明治時代まであった書院のことです。

江戸時代に編さんされた『尾張名所図会』によると、書院は大治小学校のプールの辺りに建っていたと推定されますが、今では跡形もありません。しかし、書院は東京国立博物館の庭園内に移築され、現存しているのです。

誰がどんな経緯で明眼院から移築し、なぜ、応挙館と呼ばれるようになったのでしょうか。

明眼院は、南北朝時代に眼病治療を始め、日本初の眼科医院となりました。その評判は広く伝わり、皇族の治療もしました。

境内には多くの建物が立ち並び、治療や拝観に訪れる多くの人で、たいへん賑わっていました。その境内に、寛保2（1742）年に、書院が建てられました。

「日本写生画の祖」ともいわれる円山応挙も眼病に苦しみ、治療のため滞在していたようです。



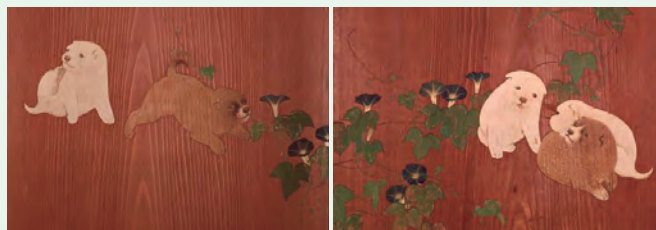
円山応挙(1733-95)肖像画  
(山跡鶴嶺筆「応挙像(部分)」  
兵庫県大乘寺蔵)

書院の床の間や襖と、廊下の板戸に  
応挙が描いた絵が残されており、眼病  
が快方に向かったお礼にと、滞在中に  
描いたとみられています。

絵の中には「天明庚辰春閏月 平安  
応挙」という、天明4（1784）年の応  
挙の署名があります。

特に注目するのは、板戸に描かれた  
「朝顔あさがお狗子くし図ず杉戸すぎと」です。朝顔の咲く  
庭で無邪気に遊ぶ子犬たちを、毛の一  
本一本まで見事に表現しています。応  
挙の描いた多くの動物画の中でも、特  
に有名な作品です。郵便切手にも、こ  
の絵が使用されています。

明治7（1874）年に医制が定められ



「朝顔狗子図杉戸」東京国立博物館蔵  
(東京国立博物館デジタルコンテンツ)

てからは、資格のない者による医療行  
為ができなくなり、収入源が激減した  
明眼院の経営は、苦しくなっていました。

明治20（1887）年に、旧三井物産  
の初代社長・益田孝が応挙の絵がある  
書院を買い取り、御殿山（現東京都品  
川区）にあった邸宅内に移築しました。

茶人でもあった益田は、この書院を  
応挙の作品があることから「応挙館」



益田孝（1848-1938）  
(三井文庫蔵)

と呼び、財界人や文化人を招いて、茶  
会の場として使用しました。

その後、応挙館は宮内省（現宮内庁）  
に寄贈され、東京帝室博物館（現東京  
国立博物館）の庭園に移築されました。

紆余曲折を経た応挙館は、明治20  
年までは明眼院の境内にあった、大治  
町にとってかけがえのない文化遺産で  
す。東京国立博物館に行った際は、応  
挙館をぜひ見てください。



東京国立博物館庭園にある「応挙館」  
(東京国立博物館デジタルコンテンツ)



## 第2節 伝統芸能の伝承

### 神楽太鼓

大治町を含む愛知県西部には、「神楽太鼓」と呼ばれる、春と秋の祭礼に付随した余興としての芸能があります。

町では、五穀豊穡や町内安全を願い、神楽屋形に据え付けられた2つの太鼓と笛で囃子を奏でながら、地区内を引き回します。皮をきつく張った太鼓を細長い竹バチで打つため、特徴のある甲高い音が出ます。

神楽屋形の館の部分の名古屋仏壇の技法による豪華な造りで、屋根には「源平合戦」などの場面が彫刻で表現されています。

各地区の保管庫には、古い神楽屋形の部材や旗なども収められており、その中には、年号が記されたものもあります。それにより、町内で神楽屋形が用いられ始めた時期を推測することができます。花常には、神楽屋形の部品のと思われる嘉永年間（1848～1855）の銘がある板材が残されていることから、江戸時代後期には、神楽屋形を用いていたと考えられます。

町内では、昭和時代の前半に祭礼の規模が縮小してしまいましたが、もう



きらびやかな神楽屋形

一度、盛大に神楽太鼓を打ち鳴らせるよう、昭和42（1967）年に花常壮年会が発足しました。

その動きは、ほかの地区にも波及していき、各地区の社務所でも熱心に太鼓の練習をするようになりました。

昭和56（1981）年に、町の主催で太鼓教室を行い、合同で練習できる機会をつくりました。

平成4（1992）年には、町全域で神楽太鼓の演奏技術の継承を目指して、「大治太鼓保存会」が発足しました。

芸能です。

男性が御幣と鈴を持ち、和紙を幾重



八ツ屋地区によって上演された、公民館竣工祝いの嫁獅子（昭和55年）

にも貼り重ねてできた獅子頭をかぶり、黒紋付きを着て演じます。太鼓と笛の囃子に合わせて、緩急のある動きをします。御幣や鈴を回しながら投げ上げる場面があり、曲芸のような要素があります。

嫁獅子は、八ツ屋で平成の初めまで演じられていましたが、演者が高齢となったため、途絶えてしまいました。そこで、大治太鼓保存会の会員が指導を受け、引き継いでいます。

伝統芸能の伝承が危ぶまれるなか、大治太鼓保存会は、神楽太鼓や嫁獅子の継承に尽力しています。

### 嫁獅子

嫁獅子は、祭礼や子どもが生まれた時などに悪魔祓いのために演じられる



## 第3節 地域に伝わる信仰と風習

### 信仰

それぞれの地域で、さまざまな祭礼が行われています。いずれも地域のつながりを保つ大切な行事で、時代に即した形に変化させながら、受け継がれています。

#### ●大治町の天王祭

町の天王祭は、津島市の津島神社の祭礼である、尾張津島天王祭に前後する時期に行われます。

津島神社は、除疫や寿福の神である牛頭天王信仰の中心社として、あつく信仰されています。尾張津島天王祭は、7月第4土曜日に宵祭が、翌日の日曜日に朝祭が行われています。宵祭で提灯を揺らめかせながら進む巻藁舟や、朝祭での華やかな車楽舟の様子など



津島神社の尾張津島天王祭

は、古くから多くの人を魅了してきました。

この天王祭に関連した行事は、形を変え、全国に見られます。町では、地区に病害虫を入れないようにして豊作を願う祭礼として、受け継がれてきました。

6月末～7月初めに、津島神社で札を受け、地区に「天王迎え」をします。その札は、地区の神社で津島社を祀る場合はその祠に納め、津島社のない神社では境内に仮の祠（オシャトウ）を立てて納めます。

西條の八剣社では、毎年7月2日の午前9時に、社務所の前にオシャトウを立てます。オシャトウに津島神社の札を納め、酒やさきいか、くつわなどを供えます。また、わら細工の竜を飾り、周りに竹笹で結界を張ります。その後、塩や酒で清め、神事を行います。

期間中は毎日午後5時に、持ち回りでろうそくを灯します。

このようにして75日間続けた後、竜や竹笹などを境内で焚き上げ、「天王送り」をします。

町内のほかの地区でも、おおむね同じような流れで行います。地区により、オシャトウや飾りはさまざまです。西條ではわら細工の竜、太陽と月や星を

ほどこした献灯籠、一本の柱の上に乘せたオシャトウがよく見られます。

また、地区に疫病が入らないようにするため、地区の境にしめ縄を張ることもあります。

元来は、道の両側に立てた竹の間にしめ縄を張り、その下を通行していま

した。しかし、車の往来が増えたことなど、生活環境は大きく変化してきました。そこで、道の片側に2本の竹を寄せてしめ縄を張る地区、一本の竹に輪締めをする地区など、今の時代に合った形に変化させつつ、続けられています。



わら細工の竜と、日月星の文様がある献灯籠（西條南屋敷、平成29年）



わらで覆う、古来の方式を受け継ぐオシャトウ（中島、平成29年）



常設の天王社に祀る（三本木、平成25年）



高い位置に渡したしめ縄（堀之内、令和5年）



道の片側に寄せたしめ縄（西條坂牧島、令和4年）



輪締め（三本木、令和5年）



### ●虫送り

虫送りは、地区に害虫が入らないようにし、また地区から追い出して、農作物を守るための祭礼です。

西條では、地区ごとに神社がありますが、いずれも7月24日に祭礼を行っています。虫を地区の外に払う行事であるため、払われた先の地区でもまた、すぐに虫を追い払います。

田之社では、午前中から境内の草むしりや掃除をし、社に供物を用意します。

用意が整ったころ、隣の地区の祭礼を終えた宮司を迎え入れます。宮司の祝詞に続き、役員が順に参拝します。祭礼が終わると、宮司を隣の地区に送ります。

かつて、虫送りや春祭り、秋祭りなどには、各組の持ち回りで神楽を出し、引き回していました。しかし、祭礼日が毎年固定されているため、年によっては平日にあたることになります。次第に平日の祭礼の人手が不足したため、神楽を出さずに規模を縮小して行いました。それ以来、神楽は使われな



西條 田之社（西條、令和元年）

くなりました。

このほか、町の神社では、11月に秋葉祭と新嘗祭、12月31日から1月1日にかけて新年を迎える初詣、1月15日に左義長などを行っています。



地区の人たちと迎える新年（堀之内天満宮、平成8～9年）

### ●地蔵祭り

町には多くの地蔵があり、初地蔵、



夜に行う地蔵祭（馬島）

地蔵盆、夏地蔵などの祭りが 있습니다。

地蔵は、子どもを守護することから、もともとは、子どもが中心となつて行う祭りだったようです。

当日は、地区の地蔵堂に飾りつけと供え物をして、僧侶を招きます。また、住民自身でお経を上げる地区もあります。

参列者がお参りをした後、お下がりを受けます。

鎌須賀では、上地区と下地区のそれぞれに地蔵堂があり、初地蔵祭は、旧暦1月24日の前の日曜日に合同で行います。

当日、役員が地蔵堂を飾りつけ、紅白の餅とお菓子の準備をします。

読経の後に、紙芝居と餅投げをします。会場は年により、上地区と下地区



浄国寺の住職による読経（鎌須賀）



大勢の参加者でにぎわう餅投げ（鎌須賀）

で交互に行います。

平成の始めごろからは、紙芝居はなくなり、餅投げは上地区では神明社、下地区では白山社で行われることになりました。

### ●弘法祭り

西條、花常、馬島、八ツ屋、北間島、堀之内では、弘法様のお祭りをしています。

これらの地区には、「弘法様」の石像が伝わる家が何軒かあります。弘法大師の命日に近い毎年4月下旬のお祭りの日に、子どもたちがその家を訪れてお参りし、お下がりの菓子などをいただく行事です。

子どもたちは口伝えなどで、どの家に弘法様があるかの情報を共有していました。自分の住む地区に弘法様がない場合も、近隣の弘法様を訪ねて、お参りする子もいました。

弘法様をお守りする家では、菓子などを用意しておき、訪れた子どもたちに配ります。年に一度、大勢の子どもたちと交流を楽しみました。

昭和50年代頃まで、弘法様をお参りする子どもの姿が見られました。

### ●盆行事

盆の行事では、西條の殿池神社で8月12日に「盆送り」が、三本木の白山社で8月15日に「盆提灯」が行われています。白山社は、小学校高学年から中学生までの男児が中心で行います。神社の入口にひときわ大きな提灯を掲げ、境内には赤い提灯を灯します。





殿池神社での盆送り（西條、令和6年）

八ツ屋の「提灯とぼし」は、浴衣を着た子どもが、提灯を手に各家を回り、ろうそく代を受け取ります。令和4（2022）年までは5日間行っていました。

## 風習

少し昔の大治町で使われていた独特な言葉や風景、習慣などをまとめました。

### ●嫁入り

嫁入りがあると、近隣へのあいさつを兼ねて、家の屋根から菓子をまく、「菓子まき」がありました。「菓子ほかり」と呼ぶ人もいます。

正式には、菓子を2回まきます。

1回目は、花嫁が実家を出る時に実家で行います。この際の菓子は、実家が用意しました。

2回目は、花嫁が婚家に到着した時に、婚家で行います。花嫁が婚家に入り、仏壇にあいさつをしているところ、菓子まきが始まります。この菓子は、婚家が用意しました。

嫁入りがあることを人づてに知っ

たが、令和5（2023）年からは2日間に短縮しました。

### ●元服

堀之内では、子どもが中学3年になると、元服の儀式を行います。毎年、春祭りの日の午後に、元服の子どもが天満宮の拝殿に上がり、神職の祝詞とお祓いを受けます。

近年では、行事に参加する子どもは少なくなりましたが、神事は行い、地域の子どもの健やかな成長を祈念しています。



花嫁の門出（昭和58年）



実家と婚家の両方で、お披露目の食卓会（昭和60年頃）

た、小さい子どもから大人まで、大勢集まります。人々は持参した袋を片手に、競うように菓子を拾い集めます。割烹着の裾を広げて、袋代わりにする女性の姿もありました。

平成に入ると、まくのではなく、袋詰め菓子を用意して、近隣の家に手渡しで配ることが多くなりました。

また、嫁入り道具を婚家に運ぶトラックは、縁起を担いで後退しない慣わしがあります。

万が一、すれ違いが難しい道で対向車が来た際は、対向車に事情を話してご祝儀を渡し、後退して道を譲ってもらいました。

また、西條では嫁入りがあった家に肥をまく風習がありました。



花嫁の実家を出る、嫁入り道具を積んだトラック（昭和41年）



昭和40～50年代に、嫁入りで大治にきました。婚家に着くと、近所の人々が菓子まきを目当てに大勢集まっていて、驚きました。2階のベランダに山のように菓子が用意してあったのが、印象に残っています。

### ●葬送

かつては、葬儀場や檀那寺ではなく、

自宅や地区の集会場で葬儀を行っていました。町では、貸出用の祭壇を5基用意していました。また、コミュニティセンターは、葬儀会場としての貸館もしており、その場合には、翌日までひと晩通しての利用ができます。

しかし、近年は葬儀場で行うことが多くなったこともあり、コミュニティセンターでの葬儀は、平成10年代前半でなくなりました。

また、大治村となる前のそれぞれの村に墓地があったため、大字ごとに墓地があります。三本木、砂子、鎌須賀、東条、北間島、堀之内では、葬儀があると、この墓地で火葬しました。

砂子では、昭和48（1973）年の葬儀で、火葬をする「おんぼさん」を招いて、地区の墓地での火葬をした記録があります。堀之内では昭和60年代頃まで、地区の「講組」という住民の集まりで協力して火葬をしました。

三本木の墓地には「三本木火葬場」がありました。自宅で葬儀をした後、火葬場まで葬列を組んで送ります。その際、親族は白装束に草履をはきます。火葬は講組で行います。一晩かけて火葬した後、翌朝に、親族が骨上げをします。墓地での火葬は、平成10年代半ばまで行われていました。

鎌須賀は、伊勢湾台風で墓地の火葬小屋が倒壊してしまうまでは、地区で火葬をしていました。

### ●かつてあった祭りや地区行事

〈秋葉祭（西條南屋敷）〉

昭和40～50年代頃まで行ってい



た行事です。秋の夕方、各家から1人が総代の家を訪ね、「かきまし（混ぜご飯）」をいただきます。その後、田之社へ移動し、火を焚き、大人は火の守をします。

子どもは、この日は「何をしてもよい日」でした。小学5・6年の年長者がリーダーとなって、他人の家の畑からサツマイモを掘り出して焼き芋にしたり、庭の柿を取って食べたりしました。このころ、柿の木は多くの家がありました。

大人は一緒に食べながら、「これは、あの家の柿だな」などと思いながらも、この日だけは、決して怒ることはありませんでした。

#### 〈西條の二十五役「松葉会」〉

西條には、「松葉会」という同年の会がありました。

20歳で会を結成し、積立金を始めました。25歳の年に、積立てたお金で芝居を呼びました。光暁寺を会場として境内に櫓を組み、午後5時ごろから上演をしました。娯楽が少ない時代でもあったことから、毎年の松葉会による芝居は、住民にとって大きな楽しみの一つでした。

その後も積立を続け、一部を地域に寄付をして、残りで会員同士の交流会をしてきました。

会は毎年誕生し、名称も同じ「松葉会」だったため、「〇年生まれの松葉会」と区別をしました。以前は男性だけの会でしたが、後に女性も加入するようになりました。

この地区が、古くは「松葉荘」にあったと伝わることもあり、「松葉」は人々にとってなじみ深い言葉です。西條のことを「松葉」と呼ぶ人もいます。

昭和40年代半ばの年を最後に、新しい会の結成はなくなりましたが、それまでにできた松葉会は、今でも交流が続いています。

#### 〈八ツ屋の屋外映画〉

昭和50年頃まで、16ミリフィルムを借りてきて、映画会をしていました。旧名古屋津島線の1本北にある、消防倉庫前などの外壁にスクリーンを立てて、映していました。

#### ●開店祝いの花

開店祝いの店先に並ぶスタンドの花は、開店と同時に、近所の人が持ち帰ります。そのため、開店から数時間で、花のない、緑色の葉だけのスタンドになります。花を持ち帰るのは、大勢の客が来店した「繁盛の証」として、店側も歓迎していた慣わしでした。

近年は、開店時にスタンド花を設置する店が少なくなったこともあり、見



店舗の開店時に飾られたスタンド花  
(昭和58年)

かけることは少なくなりました。

また、祝い花だけではなく、葬儀の花も、持ち帰る風習がありました。

#### ●食べ物

##### 〈小麦まんじゅう〉

田植えの中休みに、あぜに座って食べていました。小麦粉を練り、餡を包んで蒸したものです。シンプルなまんじゅうですが、甘味が貴重な時代には、おいしさもひとしおで、残りの作業の力が湧いてきました。今でも、田に水を入れ始める5月中ごろから和菓子屋に並び、季節を告げるお菓子として、楽しみにしている人も多くいます。



小麦まんじゅう



田植えの風景

#### 〈黄飯〉

くちなしの実で黄色く色づけをした、祝いのご飯です。端午の節句の日に、男の子の健やかな成長を願って食べます。魔除けや邪気払いの願いも込められていると伝わります。

#### 〈川魚料理〉

平成初頭ごろまでは、水路などにカゴを沈め、モロコやハエを捕まえる姿がよく見られました。捕まえたモロコやハエは、甘露煮にして食べます。モロコは押し寿司の具にも使われたため、押し寿司器がある家庭も多くありました。

フナを味噌や大豆などと共に煮込んだフナ味噌を作る家庭も、多くありました。煮込み時間がかかるので、冬には石油ストーブの上に鍋を載せて煮込み、骨まで柔らかくさせました。冬は、フナ味噌を煮込むにおいが、多くの家から漂っていました。



川魚料理「モロコの押し寿司」

うちは、モロコ寿司にエビも入れていたよ。



押し寿司や川魚料理は、盆や正月、祝い事などに作られるごちそうでした。大人はよく食べましたが、あまり好まない子どもが多かったようです。

#### 〈餅つき〉

年末には、家族や親せきが集まり、餅をついていました。ある家では、毎年5～6臼分の餅をついていました。昭和50年代半ばころから、餅つき機



新年を迎える餅つき



自宅で食べるための、のし餅



お供え用の丸餅

が使われ始めたようです。

#### ●少し昔の大治の風景（町民からの聞き取り）

##### 〈昭和20年代頃〉

夜、窓を開けていたら、ホタルが入ってきて、蚊帳に止まってピカピカ光っていました。男の子たちは、円楽寺川で真っ裸で泳いで遊びました。あのころの川の水はきれいでした。見渡す限り田園で、甚目寺観音の三重塔が大治からよく見えました。

中村公園から津島までの名鉄バスは、木炭バスでした。出発前に、運転手が車の後ろにあるカマのふたを開けて木炭を入れ、風車を回してガスを発生させ、30分ほどしてから発車しました。坂道では乗客が降りて、バスを後ろから押しました。木製の大正橋は、車が通るたびにグラグラしました。

##### 〈昭和20-30年代頃〉

よく、福田川で泳いで遊びました。



福田川の東隣に流れる神田川。奥には殿池神社の松が見えます(昭和30年代初～中頃)

その帰り、川の近くのお宮の隣にあったアイスクリン（アイスクリーム）屋に寄って帰りました。お宮には紙芝居屋が来て、家にあった野菜を料金代わりに渡して、楽しみました。

##### 〈昭和30年頃〉

川でウナギやドジョウ、コイが獲れました。四手網よつであみを使うと、モロコやハエなどの川魚が多く獲れました。

##### 〈昭和45年〉

馬島に住んでいて、夜にはホタルが飛んでいました。高い建物はほとんどなく、家の窓から東を見ると、新川の堤防が見えました。

表7-1 大治の言葉の意味と使い方

| 大治の言葉               | 意味・使い方                                   |
|---------------------|------------------------------------------|
| かんす                 | 蚊                                        |
| じゃんけん<br>「ぐー、ぴー、ぱー」 | 「ぐー、ちょき、ぱー」                              |
| まわし                 | 準備                                       |
| こわい                 | 固い                                       |
| やぐい                 | もろい。作りが悪い<br>「この壁はやぐい。すぐ壊れそうだ」           |
| うざられる               | 怒られる<br>「〇〇を失敗して、うざられてしまった」              |
| ほかる                 | 投げる、捨てる「ごみをほかる」                          |
| 〇〇さ                 | 人名の後に「さん」ではなく「さ」をつける<br>「隣の太郎さのところ行ってくる」 |



昭和50年代頃に、名古屋市やテレビの影響で「ちょき」に変わったのではないかな。今でも、孫や地域の子供と遊ぶ際に、気を付けないと「ぴー」と言ってしまう。



## 第4節 郷土の地名

地名は、その土地の成り立ちや、人との関係でつけられています。

大治町には12の大字があり、庄内川、新川、福田川の川筋があることから、微高地が点在している特徴を示す地名なども残されています。いくつかの字名の由来を見ていきましょう。

### ●農村地帯に由来する地名

なわしろ  
**苗代**（堀之内）

種もみをまき、稲を育てる場所である苗代があったことが推測されます。また、「もとなわしろ元苗代」もあります。

ごたんばた  
**五反畑**（砂子）

畑の大きさを表した地名で、その字の広さが分かることにもなります。

ひがしだめん にしだめん  
**東田面・西田面**（八ツ屋）

大字の中でどの位置にある田なのかを示すものです。

うらはた  
**浦畑**（長牧）

「浦」の字が使われていることで、北側に位置する畑、または水分が多く含まれる地域などから、つけられたと考えられます。

### ●土地の特質に由来する地名

ふかだ  
**深田**（中島・堀之内）

土地が深く、ぬかるむ場所をさすことが多い地名です。三本木には「西深田」や「前深田」もあります。

さくらぎ  
**桜木**（砂子）

河川のある地域に使われることがあり、「割く」を別の漢字にあてた、または桜が植えられていた場所だったとも考えられます。

かきのき  
**柿木**（北間島）

桜木と同様に、河川付近の地域に使われることがあり、土地を「欠く」を意味することがあります。また、柿が採れる場所だったことを示すこともあります。

かわぐる  
**川畔**（鎌須賀）

川のほとりを意味し、川と川との境を示す場所と考えられます。

すさき  
**須先**（西條）

過去には「洲先」と呼ばれており、川で押し流された土や砂がたまってできた場所であったと推測されます。

### ●人の生活と関係する地名

ごうち  
**郷内**（八ツ屋・東條）

各地区の集落部を示し、最初に開けた場所、役所などがあって地域で中心となっていた場所を意味します。似た字名に「ごうなか郷中」があります。

やしき  
**屋敷**（北間島）

屋敷が立ち並ぶところを示します。また、町には「東屋敷」、「西屋敷」、「南屋敷」、「北屋敷」もあります。

せんじゅどう  
**千手堂**（砂子）

この辺りに、千手観世音菩薩像が祀られた千手堂があったことからつけられたと考えられます。

地名は、その場所の特質や来歴などを知る手がかりの一つになり、町の成り立ちを考える時に重要になります。しかし、時代が進むにつれ地域が統合されて、昔の地名が失われていくことがあります。

『大治町史』に紹介されている江戸時代の各字の概略図にも、今では見られない地名が多く記されており、違い

を目の当たりにします。当時の景観を見ることはできませんが、町内には、江戸時代から残る道もあり、ほとんど町並みが変わらない場所もあります。

江戸時代（天保12年）の古地図を見ると、花常では「どぶ池田」や「戌亥畑」、三本木では「深田」や「西出畑」など田や畑の字を含む地名があります。ここから、純農村地帯であり、水分が多い田もあったことが分かります。

このように、自然条件や土地の由来から名付けられた地名もあり、町の歴史を想像する手がかりにもなります。





## 第5節 伝統の継承と新しい文化

### 著名な文化人

いとうそうわ  
伊藤宗和（茶道）（平成 11（1999）年没）

茶道一筋に活躍した裏千家の名誉師範で、茶道を探究した人です。

平成 3（1991）年に、茶道関係では初めて、愛知県から表彰を受けました。公民館講座や茶道同好会の講師として、後進の育成にも努めてきました。



公民館講座の茶道教室

よしだ たけし  
吉田 雄（七宝焼）（令和 6（2024）年没）

平成 3 年に第 38 回日本伝統工芸展に入選し、日本工芸会に所属しました。伝統工芸士として、多くの作品を残しました。

伝統にとらわれることなく感性を磨き、創意工夫を凝らした七宝焼の制作に取り組んできました。



文化展での展示

やす だじょううん  
保田紹雲（能面）

名古屋市職員だったころ能面打ちを始め、定年後に本格的に取り組むようになりました。制作した作品の完成度の高さが能楽師に認められ、実際の舞台で使われるようになりました。平成 22（2010）年には、能楽の流派の一つである宝生流の宗家継承披露能で使われました。

平成 3 年頃に能面研究会「面紹社」を立ち上げて、後進のために能面打ち



公民館での能面講座

を指導し、名古屋能楽堂や名古屋市鶴舞中央図書館などで継続的に作品展を行ってきました。

たけうち けい  
竹内 恵（絵画）

小さいころから絵を描くことが好きで、教員生活の傍ら、本格的に絵を習い、創作活動を続けてきました。

平成 12（2000）年に日展に初入選しました。油彩画だけではなく、水彩画にも取り組んできました。町内で絵画教室の講師としても活動しています。

令和元（2019）年には、町へ、西

條にある神社を描いた水彩画の寄贈がありました。



八剣社の大銀杏を描いた水彩画

### 新しい文化の芽吹き「つるし飾り」

平成 19（2007）年、翌年の文化展に展示することを目標に、町内でつるし飾り制作が始まりました。

初めは手探りで制作でしたが、平成 20（2008）年に日本三大つるし飾りの一つである伊豆稲取を訪れ、その学びをもとに、138 吊りのつるし飾りを作り上げ、文化展に展示しました。

この華やかな展示に魅せられた町の人々も加わって「雅の会」を発足し、本格的なつるし飾り制作が始まりました。

つるし飾りは、子どもの健やかな成長を願い、鶴や桃など、幾種もの細工物に思いを込めて作ります。

毎年、桃や端午の節句に、町内の公共施設でつるし飾りを展示し、訪れた人々

の目を楽しませています。

また、平成 21（2009）年からは、名古屋駅前のホテルで、大規模な雛のつるし飾りを展示することが恒例になりました。

町のつるし飾りは、新たに根付いた文化として、広く町内外に知られるようになりました。



ホテルのロビーを華やかに彩る、つるし飾り

# Column

## わが生涯ミステリー、その背景にあるもの



30代、優しいまなざしで…

「れんじょうみ きひこ連城三紀彦」かつて大治町に住み、美しく華麗な文体を持つ、唯一無二の作家をご存知でしょうか。

連城は、昭和23(1948)年に、名古屋市中村区で生まれました。本名は加藤甚吾です。父は病弱で、母が家計を支えていました。小学生のころから勉強が好きで、父の本をよく読んでいました。また、映画好きの母の影響で、名古屋駅の映画館にもよく行きました。

早稲田大学に進み、サルトルやカミュなどのフランス文学に傾倒します。

また、大映の研究生として、シナリオを学びました。

昭和46(1971)年には、パリに留学し、脚本の勉強をしました。

父の死後、昭和51(1976)年に母と大治町に引っ越し、昭和59(1984)年に『恋文』で第91回直木賞を受賞する、36歳ごろまで住みました。その間、『変調二人羽織』『戻り川心中』『宵待草夜情』などで、数々の賞を受賞しています。

岐阜の寺院で生まれた祖母の血を継

ぐ思いと、寺院の静けさや厳かな雰囲気魅了され、昭和62(1987)年に東本願寺で得度します。将来は、葬儀を無料で行う「いおり庵」を持ちたいと考えていました。

探偵小説専門誌「幻影城」の仲間の泡坂妻夫や田中芳樹、自身が影響を受けた瀬戸内寂聴とも交流がありました。

平成7(1995)年頃、母の介護のため再び大治町に住み始め、平成20年の母の死後は、自身も闘病生活をしながらの執筆活動となります。

平成25(2013)年に65歳で逝去しました。

その後に改めて功績がたたえられ、日本ミステリー文学大賞特別賞を受賞しています。伊坂幸太郎や綾辻行人などの作家にも大きな影響を与えています。

連城は、感情や心情を豊かに述べ表す美文体からネオ・ロマンと評され、秀逸な恋愛を加味したミステリーも多く書きました。原作を書いた映画「もどり川」で意気投合した萩原健一をモデルとした『恋文』など、男女の繊細な機微を描いても一流でした。



金屏風の前で受賞スピーチ